

ジュザーム

それから数年が過ぎた。単調な毎日だった。茶褐色の荒々しい岩肌と不毛の岩石砂漠に浮かぶオアシスの村、抜けるような青い空、となり村との争い、日なたぼっこをしながら楽しむ噂話、農作業の手伝い、それが全てだった。

ある夏の日、サタールは小麦の刈り入れをした後、シャツの袖がぐっしより血に染まっていることを弟から告げられた。刈り入れの最中に、鎌で怪我をしたそそっかしい奴が自分の服に触れたのだろうと思った。よく調べると小指から手の甲にかけて深い鎌きずがあった。しかし、不思議なこと何の痛みもなかった。ハーキム（村医者）のところで手当を受けたが、小指は化膿してそのうち無くなってしまった。

その後、しばしば指先や足にやけどや怪我をしたが、妙なことにひどく化膿してから目で見えてやつと気づくのである。そのうち体中に赤いはれものが出てくるのに気づくようになった。時々熱が出て体の節々がひどく痛む。医者に見せたいが、ペシャワールは遠い。第一よほどのことがない限りペシャワールなど村人はゆかぬ。こんな寒村では一生に一度見れば良い所だ。

サタールの病状は年々悪化して行った。両手の指は殆ど無くなり、足指もいつの間にか抜け落ちてしまった。まだ若いのに頭髮は抜けてはげあがり、瞼が閉じにくくなって白まなこがむきだしになった。近所の者も気味悪がるようになり、家族も心配した。崇りだと言う者もあった。

とうとう決心して、ペシャワールの医者のところに行くことにした。バス賃がなかったの、知り合いの運送業者に頼んで乗せてもらい、やつとたどり着いた。ペシャワールには同郷のクナル出身者が居たので、とりあえず身を寄せ、出来たばかりの、無料診療をしていると聞いた病院に行った。

何時間も待たされてやつと医者に会えたが、「大丈夫、そのうち治る」と言われ、一目見るだけで診察らしいものもなく、面倒臭そうに処方箋を渡されただけだった。もう一枚の紙切れには何か英語が書いてあったが、よく分からなかった。帰宅して知人に見せると、「おまえはジュザーム（らい）だ」といわれて突然追い出されてしまった。

「ジュザーム」とは何だろう？ 以前にどこかで聞いたことがあるが、サタールはよく知らなかった。その知人に食い下がった。

「なぜジュザームがいけないんだ。同じムサルマン（イスラム教徒）なのに何故そんなことをするのだ。」

彼は屈辱に耐えられなかった。

